

第2回いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会 会議録	
会議名	いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会
開催日時	令和7年 5 月 30 日(金) 15 時 00 分から 17 時 00 分
開催場所	区立グリーンホール 504 会議室
出席者	<p>[委員]11人(敬称略)</p> <p>岡田 匡令(会長)、木村 政司、岡本 信広、杉田 理恵、なかむら しんいちろう、川口 雅敏、別府 明雄、大橋 薫、甲斐田 洋希、金子 和也、平岩 俊二 (欠席:2人)</p> <p>[事務局]</p> <p>文化・国際交流課長 高田 智也</p>
会議の公開	公開(傍聴できる)
傍聴者数	0 名
議題	<p>1 開会</p> <p>2 会長あいさつ</p> <p>3 今後のスケジュール</p> <p>4 部会の中間報告について</p> <p>(1) 文化芸術部会</p> <p>(2) 多文化共生部会</p>
資料	<p>資料 1 いたばし文化芸術・多文化共生ビジョン検討会工程表</p> <p>資料 2 文化芸術部会 意見要旨</p> <p>資料 2-2 作業シート/文化芸術編</p> <p>資料 3 多文化共生部会 意見要旨</p> <p>資料 3-2 作業シート/多文化共生編</p>
議事録	<p>【開会】</p> <p>事務局</p> <p>定刻となりましたので、ただいまから第 2 回板橋文化芸術多文化共生ビジョン検討会を開会させていただきます。初めに岡田会長からご挨拶を頂戴できればと思いますので、よろしくお願いいたします。</p> <p>【会長あいさつ】</p> <p>会長</p> <p>5 月の末になって、いよいよ初夏になり、もう少し暖かくなるかと思うと、突然3月の気候ということで防寒具を着てきました。このような変な気候の時代になったのは残念ではありますが、それにめげず人間は適用していけると思います。この検討会も板橋区が様々な社会環境の中で適用していくため</p>

の仕組みを提供するということですので、皆さん方の英知をどうぞお出しただければなと思っています。どうぞよろしくお願いします。

事務局

ありがとうございました。前回検討会に欠席されておりました、大東文化大学国際関係学部長の岡本信広先生が本日初の顔合わせということで、ご挨拶をいただければと思います。

(岡本信広委員の挨拶)

事務局

ありがとうございました。検討会委員として区職員が参加しておりますが、4月の人事異動で新しい職員になりましたので、ご紹介させていただければと思います。

(異動職員の紹介)

また、前回の検討会にて、本会議は公開することとなりましたので、会議録を作成し、公開いたします。そのため、議事の内容を録音させていただきますので、ご了承ください。なお、本日、現時点では傍聴希望者はいないという状況でございます。

【今後のスケジュール】

会長

それでは、次第に沿って進行いたします。まず、次第の2番、今後のスケジュールについて、事務局から説明をお願いします。

事務局

(次第2について説明)

会長

ありがとうございました。ただいま事務局より、今後のスケジュールについての説明がありましたが、ご意見はないでしょうか。

(意見等なし)

会長

意見がないようでしたら、事務局の説明のとおり検討会報告書をまとめていきたいと思っています。

【部会の中間報告について(文化芸術)】

会長

次に、次第の3番、文化芸術部会の中間報告について、事務局から説明をお願いします。

事務局

(次第3(文化芸術部会)について説明)

会長

ありがとうございます。事務局から部会のご報告をいただきましたが、委員の方から様々なご意見をいただき、この検討会の結果をさらに豊かなものにしていただければと思います。皆さん、一言ずつ伺いたいと思います。いかがでしょうか。

委員

板橋区は江戸時代の板橋宿だけでなく、元々農業主体の区であり、農業に基づく伝統芸能が多く残っています。現在、これらの伝統芸能を維持することが非常に困難になっています。特に国指定無形文化財の田遊びなどは、役が家によって決まっているという形式もあり、継承が大変です。何らかの形で支援できればと思います。

会長

伝統文化の1つに農業文化があり、板橋には昔、農地や果樹園がありましたが、現在はほとんどが住宅化され、それすら記憶にない方が多いと思います。他にはいかがでしょうか。

委員

テーマ(2)の「開かれた文化施設の推進」について、「来館のきっかけとして赤ちゃんに特化したイベントがあるとよい」とありますが、具体的にどのようなものがあるのでしょうか。

委員

文化芸術部会で出た話です。当財団が共催事業で実施している「0歳からのジャズ」や「0歳からのオーケストラ」といった鑑賞事業を紹介する場面があり、その中でこういった意見がありました。このような事業は全国的に展開されており、今まで気兼ねしてコンサートに行けなかった親子世代に受け入れられています。板橋区でも来月からジャズコンサートを開催する予定です。

委員

補足させていただきます。私の経験として、赤ちゃんが生まれる前は胎教としてCDなどがありますが、赤ん坊が生まれた後に生の良い音楽を聞かせようとサントリーホールに行ったところ、別室での鑑賞しか許可されませんでした。赤ちゃんの情操教育として本物の生の音楽を聞かせる機会があれば

よいと思います。

また、「赤ちゃんの駅」も板橋区から始まったと聞きました。板橋区は子育て世代に優しく、文化的な面でも子育て世帯をサポートする1つの切り口としてこういうイベントがあればよいと思います。

会長

文化芸術の中の音楽というジャンルで、0歳から感性を育むことは重要です。問題はどれくらいチャンスを与えられるかです。年1回500人規模ではなく、例えば4回開催して全体で3000人程度参加できるような具体的な目標が欲しいと思います。

また、対象をどこまで広げるかという問題もあります。0歳児だけを対象にするのか、2歳、3歳まで対象にするのかというところです。学校に入れば学校教育の中で教育委員会に音楽に触れる機会を与えてもらうのがいいと思いますが、そうすると、私立学校に通う子どもは対象外になってしまうという課題もあります。

以前、モンゴルとの交流60周年で馬頭琴コンサートを聴きましたが、素晴らしかったです。多くの人にモンゴル文化を肌で感じてもらうことも大切で、子どもに限った話ではないと思います。発想を膨らませて具体化していただければと思います。

委員

ファミリーコンサートは子育て世代にとって非常に重要だと思います。胎児にも良い影響があり、妊婦さんも参加しやすくなります。子どもの教育にも良い効果があると思います。

会長

音楽療法と言って、精神的なカウンセリングや精神療法として音楽を活用する方法もあります。音楽は広い分野なので、様々な使い道があります。板橋区に行くと音楽の森のように、リズムや音色が感じられるまちになれば、それは1つの方向性になると思います。他にはいかがでしょうか。

委員

板橋らしい文化の評価について、芸術や文化は保存・継承・発展というサイクルが成り立つことが重要です。例えば絵本を推進するにしても、すべてを区が担うのは予算や人員の制約から難しいでしょう。そこで起業の可能性を考えてはどうでしょうか。

インキュベーターのような形で、新しい絵本作家や伝統芸術と絵本を結びつけた事業化のアイデアを募集するコンテストを開催するなど、伝統文化と絵本の融合や新しい作家の発掘、プロデュース会社の誘致などができれば、雇用も生まれ、文化の発展・継承にもつながると思います。区民や都民、日本全国から絵本関係者や事業化できる人材にチャンスを与えるようなコンテスト形式で補助金を出すなどすれば、面白い展開が生まれるかもしれません。

委員

今年 4 月になかむらしんいちろう先生にもご協力いただき、板橋の昔話を絵本という形で 2 冊作成しました。中央図書館や保育園などに配布し、板橋の文化について絵本を通じて推進する取組を実施しています。

委員

私は巻末のマップを担当させていただき、改めて板橋の広さと地形を理解しました。

また、絵を描いていただいたお二人は、ボローニャ原画展に入選した経験があり、お一人は今年も入選されています。お二人とも初めての絵本作りで経験が少ない中で頑張って絵を描いてくださいました。「買えないですか」という話もありましたが、これが購入できる形になれば、事業化につながり、広がりが出てくるのではないかと思います。

委員

今回は板橋の昔話について、絵本を通じて広げていこうという取組でしたが、これ以外にも何かを伝える手段として絵本を活用できる分野はたくさんあると思います。例えば、お知らせパンフレットなど様々な形で絵本を活用できます。教育委員会としても、区民に情報を伝える際に絵本を活用して広める取組を検討しています。

委員

「板橋の 50 人」というものがありますが、例えばその 50 人を絵本で紹介するのもよいのではないのでしょうか。

委員

様々なツールとして絵本は活用できると思いますので、「絵本のまち板橋」が区民に浸透していければと思います。

会長

その絵本は点字化されていますか？

委員

点字化はまだできていないと思います。

会長

音声化はどうか？

委員

音声化もできていません。

会長

字が読めなくても耳で聞こえるようにすることも必要ではないでしょうか。小さな子どもや視覚に障害がある方でも音で聞くことができます。1つの素材を多面的に活用するのもよいと思います。

子どもや視覚障害のある方には「音を聞かせる」、聴覚障害のある方には「見える」「動く」ことで伝えるなど、誰かのサポートがなくても自発的に楽しめる環境づくりができるとういでしょう。行政は平面的に物事を考えがちですが、立体的な発想も必要です。

委員

「絵本のまち板橋」については様々なワードが出てきていますが、区内には印刷製本業者が多数あり、形にすることができます。そこに、販売やプラスαの加工をして付加価値をつけると、出版業の分野になります。出版業は都心部にありますが、そういった編集、プロデュースする人たちとのつながりが、この本をさらに高めていくことになると思います。これは簡単にできるものではなく、大手出版社などの絵本でも有名な出版社が切磋琢磨してきた分野です。そういった出版社とのつながりがあると、会長がお話しされた部分が見えてくると思います。

会長

板橋の施策として、どこまでそれを板橋らしさの中に組み込むかが重要です。そして、どこでもやっているからではなく、板橋らしさを組み込むことが大切です。コンサート、絵本、伝統芸術など、板橋らしい文化のブランド力をどう評価するかという問題があります。

企業のブランド力は株価で測りますが、行政では何を尺度にするかというと、皆さんの口の端に上るような活動ではないでしょうか。既存のものだけでなく、それにプラスするような形にすることで、この次の議題に出てくる多文化共生の一側面になるのではないかと思います。

委員

ブランド力とは結局、認知の問題です。若い世代や学生に認識させるには、SNSの活用が不可欠です。また、頭に残るキャッチフレーズが重要です。「絵本のまち板橋」という言葉が既にあるので、これをいかに広めるかが課題だと思います。

1つの方法として、NHKの首都圏ニュースに積極的に情報提供し、取材を受けてアピールすることが効果的です。視聴率もあるので、それを見た人が訪れる可能性もあります。パブリックリレーションズをうまく活用すれば、ブランド力は比較的上げやすいと思います。

委員

確かにマスコミの協力を得ることは非常に有効です。昨年度、美術館で江戸時代の黒を基調とした絵の展覧会を実施しましたが、あまり前例がなく集客が心配でした。

しかし NHK の美術番組で取り上げていただいたところ、その後から多くの来場者があり、開館以来最大の入場者数となりました。それほどマスコミの力は強いので、活用すべきだと思います。

「絵本のまち」については、板橋区はかなり長期間 PR していますが、なかなか認知されていません。区民への周知方法として、マスコミを活用した PR や SNS を使った若者向けの情報発信を行う必要があると思います。

また、絵本だけをピンポイントで PR すると反応が鈍いので、板橋区の歴史の中での絵本や、印刷・製本会社が多い板橋の特性と絵本を関連づけるなど、様々な角度から盛り上げていくとよいでしょう。そのような視点もビジョンに入れていければと思います。

会長

社会医学的に言えば、これはシステムの問題です。個人もシステム、この会合もシステム、準備する人たちもシステムであり、様々なシステムが組み合わさって成り立っています。それぞれのシステムの関連をうまく繋げることで、板橋の文化芸術の向上につながります。

点として存在しているものが板橋に集まり、文化芸術や多文化共生などが連携していく仕組みを作り、全庁的・全区的に区民を組み込むことが重要です。検討会は部会より広い範囲の人が参加しているので、テーマも大きくなりますが、それを念頭に置いておくべきです。5 年後を目標に課題として検討するという形でもよいので、意識していただければと思います。

事務局

ブランド力については定かでない部分もありますが、様々な価値の基盤になると考えています。板橋区の観光資源や歴史など、何らかのブランドが確立することで、同じことをやっても魅力に感じられます。

例えば車の例でも、同じ軽自動車でも有名企業が出す車と無名メーカーの車では、中身が同じでも人の感じ方が変わります。「絵本のまち板橋」のような確固たるブランドは我々も目指したいところで、美術館などの地域資源を掛け合わせながら取り組んでいく必要があると、本日の議論を聞いて改めて感じました。

会長

ブランドという言葉をもっと活用していくことも大切です。

委員

個人的な話にはなりますが、私は 2023 年に関わった活動についてお話しします。現在、触る絵本に関わっており、2023 年に板橋区立美術館でイタリアの方を招いて触る絵本の講習会を開催しました。20 数名が参加し、現在では大きな広がりを見せています。8 月には TOKYO SOCIAL DESIGN というギャラリーで展覧会を開催する予定です。

現在、板橋の企業と民間グループで協力し、例えば、日本ラベルという会社と触って体験できるものをコラボレーションできないか検討しています。

皆さん平日にも時間を作って活動を広げています。ギャラリーや板橋区役所前など様々な場所で、視覚障害のある方をボランティアで駅からの案内ができないかなど企画を考えています。たった 3 日間のイベントだったものが、今では大きな広がりを見せています。区民の方も区外の方も参加されました。

私たち絵本に関わる人間にとって、板橋と言えば絵本というイメージがあります。今回のきっかけを一回限りの企画ではなく、パッケージ化して様々な場所で触る絵本を広げていきたいと考えています。「さわらぼ」という研究会を立ち上げたのも板橋の美術館です。以前、美術館の館長から、図書館や体育館は利用者が多いが美術館は人が来にくい、音楽ホールも生活と結びつきにくいという話を聞きました。板橋の美術館は他の美術館に比べてイベントの量が非常に多く、しかも無料のものが多いです。十数年かけて育てたので、さらに広げていきたいと思います。

私は現在、中高生向けの絵本講座を開催しています。子どもも大人も絵本に興味を持ちますが、中高生の部分が抜け落ちており、この年代は人が集まりにくいという課題があります。しかし中高生は発信力や SNS の活用力があり、その後大学生になれば大学もあるので、ここに繋げていきたいと思います。

板橋区では様々な場所で中高生向けの絵本講座があります。伝統工芸を絵本にするようなワークショップや、様々な施設・ホール同士を結びつける絵本は非常に可能性のあるジャンルだと思います。

私はこれまで平面の絵本を作ってきましたが、視覚的なものや他の素材を使った絵本も考えています。板橋には様々な企業があるので、協力できる企業を探したり、板橋の商店とコラボイベントを企画しており、パン屋さんや喫茶店など、それぞれのお店で広げていきたいと考えています。そのような中で、私は草の根で活動している人たちと一緒にいることを実感しており、このような委員会で方針を決めていただいていることに感謝しています。

会長

触る絵本や五感で感じる絵本がある国はありますか？

委員

平面の絵本については全国で様々なコンテストがありますが、触る絵本のコンテストは主にイタリアやヨーロッパで盛んです。去年、日本の方々が応募して入選し、イタリアの小学校などに配布されるほどになりました。たった 3 日間のワークショップからこのような展開になっています。

紙以外の素材を使ったり、板橋の中小企業と協力したり、イタリアの方に日本をテーマにした作品を見せたりするのも面白いと思います。触るという観点から、音楽と絵本を繋げるなど、様々な可能性を考えています。

会長

柔軟な発想をしていただいています。板橋の絵本が単に「絵本がたくさんあるまち」ではなく、「豊かな絵本がたくさんあるまち」であることが重要で

す。キーワードとして絵本の前に形容詞をつけると限定されますが、むしろ膨らませるような形容詞が付くと広がっていきます。

副会長

皆さんの素晴らしいご意見を聞いて考えさせられました。このシートに書かれているアピール、活性化、ネットワーク、SNS の活用、子どもを巻き込む、音頭取りなどの言葉は、よく考えると「動き」、つまり「活動」だと思います。

これらは言葉としては美しく、どこの自治体でも言われていることですが、それをどう具体的な動きに変えていくのか、どんな動きをしたら活性化するのかという話はなかなか出てきません。様々な会議に参加していますが、具体案が出ないとフラストレーションがたまります。最終的に検討会のまとめになると、抽象的な美しい言葉でまとめて終わりになってしまいがちです。

今日は多くの良い意見を聞かせていただきました。岡本先生がおっしゃった認知という意味では、絵本は書かれた瞬間に止まっているものです。そこに動きを加えるとどうなるかという、例えば図書館や美術館、カフェ、広場で読み聞かせイベントを定期的に行い、それに付随するコンペを開催する、また、なかむらさんがおっしゃったような触るイベントも動きのある絵本を活用した活動だと思います。

そのような動きのある活動を推進するためのコーディネーターやプロデューサーの人材育成が必要ですが、区役所の体制ではなかなか進みません。区長にもその話をしましたが、実現は難しい状況です。

それから、多面的多文化の共生という言葉がありますが、絵本だけでなく漫画も非常に重要だと思います。漫画やゲームは高校生や中学生でも開発できるものです。私も大学生と一緒に静岡の観光組合から依頼されて、街中をスマホで撮影し、お店をかざすとその店の特徴が表示されるアプリを開発しました。

このようなゲームを通じて街を活性化したり、板橋の文化や伝統がスマホから情報として現れるようなリアルタイムのゲーム、ポッドキャストやコミュニティラジオなども考えられますが、板橋コミュニティラジオは絶対にあるべきだと思います。DJ や MC をやりたい人は多いですし、この後の議論でも出るかもしれませんが、日本生まれの外国人も多くいます。日本人より日本語が上手な板橋在住の方もいるでしょうから、そういう人たちにラジオでトークをしてもらい、自分の立場や悩みを話してもらうようなポッドキャストやコミュニティラジオで、板橋の文化・伝統のコンテンツを継続的に動きのある形で伝えることが重要だと思います。

今日皆さんがおっしゃったことをどう動きのある継続的な活動にし、「伝える」ではなく「伝わる」ようにするかを考えていました。文化・伝統も大切ですが、漫画はもはや日本が世界に誇る文化であり、ゲームも同様です。絵本だけの話では板橋らしさにはつながらないと思います。

日本中、世界中の絵本作家が絵本を描いているわけですから、板橋生まれの絵本を漫画やゲームを通じて伝えていくような動きを作っていただけれ

ばと思います。

会長

ありがとうございました。同じ絵本でも、絵本という情報をどう効果的に発信し伝えていくかというツールは、もはや紙だけではないというご指摘です。おっしゃる通りで、行政としても IT 分野が強いわけではありませんが、現代の電気通信技術を活用して大衆化していくことが重要です。そういった視点も盛り込んでいただければと思います。

【部会の中間報告について(多文化共生)】

会長

それでは続きまして、多文化共生部会の中間報告について、事務局から説明をお願いします。

(次第3(多文化共生部会)について説明)

会長

ありがとうございました。説明について、なにかご意見ありますでしょうか。

委員

多文化共生は板橋区だけの話ではなく、日本全国で取り組まれています。板橋区で取り組む場合には、板橋区特有の事情、例えば民族性の偏りなどにフォーカスしないと、具体的な 5 年計画を立てるのが難しいのではないのでしょうか。

事務局

近年、ネパールからの住民が増加しています。地域的には、板橋区内でも高島平地域や豊島区池袋に近い板橋地域に外国人が比較的多く住んでいます。国籍の違いだけでなく、区内でも地域的な違いがあります。

委員

私がベルギーに滞在した時、日本人のコミュニティが自然とできました。その国の生活様式や禁止事項などが日本人として理解しにくいことがあるためです。コミュニティができるのは当然ですが、重要なのはそのコミュニティが閉鎖的にならないことです。それが多文化共生の本質だと思います。

子どもは特に重要です。私の子どもは 3、4 歳の下の子と小学校入学前の上の子がいる時にベルギーに行きました。現地校に通わせたところ、子どもはベルギー人の考え方を身につけ、ベルギー人の友人から「あなたの子はベルギー人だね」と言われるほどでした。

日本に帰国した際には、子どもたちが円滑に適応できるよう、千代田区の帰国子女教育を活用しました。同様に、ネパールや高島平、板橋で小学校に通う子どもたちが日本のことを学び、友達を作ると、家庭でも親に話すことで、コミュニティが日本に近づいていきます。小学校は非常に重要な役割を

果たすと思います。

会長

学校教育の中で外国籍の子どもを受け入れる際の対応はどのようになっていますか。

委員

まず日本語指導から始め、その後各学校にある日本語学級でサポートしています。しかし、最終的に日本語をしっかりと習得して学習できる状態になるのは、外国籍の生徒全体の 3 割から 4 割程度で、区が考えるゴールには届いていません。学校だけの取り組みでは不十分な部分もあり、保護者を含めた区全体での取組が必要です。

委員

日本語教室の利用者は、夫の仕事で来日した妻や、昼間働いて夜間に参加する方など、主に大人が多くいらっしゃいます。

会長

子どもが小さいうちに入国すると、本当に日本人のようになります。日本の生活文化や価値観を学校教育の中で吸収するため、家庭では親との間に溝が生じることがあります。親の日本語が十分でないと、子どもの日本語での会話が理解できなくなり、子どもは母国語を次第に使えなくなります。これは外国に移住するとほとんどの家庭で起こる現象です。

日本の教育は宗教教育がないため、受け入れやすい面があります。欧米では宗教教育がベースになっていますが、日本の教育はより寛容で、何でも受け入れる姿勢があります。攻撃に弱いかもしれませんが、平和に暮らす能力を高める教育です。日本は特定の宗教を強制せず、宗教の自由があるため、多くの人にとって住みやすい国です。

住みにくい点としては、日本の暗黙のルールがあります。日本人は真面目で厳密にルールを守ろうとしますが、一方で社会の仕組みに曖昧な部分もあります。多文化共生においては、強制的に日本に馴染ませるのではなく、彼らが日本文化を意識しながらも自然に馴染めるようにすることが重要です。

教育や言語は入り口に過ぎず、その先のコミュニティづくりが課題です。外国籍の方を負担と考えるのではなく、行政はサポーターとして、どのような政策や関わりの仕組みを作るかが多文化共生の基本的な考え方です。

委員

日本語教室の運営の中で、参加者に日本の暮らしに馴染んでもらうため、商店街の方々と一緒にバーベキュー大会を企画しました。参加者にグループごとに商店街で買い物をしてもらい、その後赤塚でバーベキューを行いました。約 20 人が参加しました。

多くの外国人はコンビニで買い物を済ませる傾向があり、特に一人暮らしの方は商店街で人と話すのが苦手です。商店街では小売店で買い物をする

ため、会話が生まれ、参加者は大いに盛り上がりました。一日限りの企画でしたが、非常に評判が良かったです。

委員

アンケートを見ると、日本人住民は外国人が増えることで治安が悪化するのではないかという不安を抱えています。外国人は日本のルールがわからず、日本人は外国人と接する機会が少ないのが現状です。

私も国際結婚していなければ、日本人のコミュニティに入りづらいと感じたでしょう。実際には日本人は排除しているわけではなく、外国人側も言葉がわからない、どう接すればよいかわからないという不安から、自分で壁を作ってしまうことがあります。

日本人家族は、日常生活に追われ、わざわざ外国人と交流しようとは思わないでしょう。私自身も日本人だったら同じ気持ちだったと思います。しかし、外国人として日本に長く住み、素晴らしい国だと感じているからこそ、共生の方法を考えたいと思います。

お互いに顔見知りになり、挨拶ができるきっかけを作ることが大切です。バーベキューや買い物など、交流の機会を設けることで関係が生まれます。

「やさしい日本語の普及と活用」については、実際には難しい面があります。ネパールや東南アジアから来た方々の中には、十分な教育を受けていない方もおり、英語も基本的な挨拶程度しかできない場合があります。そのような方にはふりがなをつけたり、やさしく言っても理解できないことがあります。

そのため、日本語教育の支援拡充が非常に重要です。より深く学び、良い就職先を見つけたいという方のための日本語教育の拡張が必要です。これは大人も子どもも同様です。

子どもは学校に通って1年半ほどで日常会話ができるようになり、発音も正確になりますが、読み書きや理解力は別問題です。日本語には生活用語と学習用語の違いがあり、学校で使う学習用語をいかに習得できるかが学力向上につながります。

小中学生の時に来日した子どもたちは、実質的に母国に戻れなくなることが多いです。国籍に関わらず、日本に定住する可能性が高いため、日本語をしっかりと習得させ、自立できるようサポートすることが、将来的に社会の負担を減らすことにつながります。

「やさしい日本語の普及活用」と「日本語教育の強化・拡張」をぜひ施策に入れてほしいと思います。各自治体には取り出し教室があり、日本語指導を行っています。また、学習指導員もいますが、専門家によると72～78時間の指導で十分で、それ以上時間をかけると、指導員に頼ってしまい、学ぼうとしなくなってしまう。予算があれば、日本語指導ボランティアの人材育成に使い、子どもたちに学習用語を教えることに活用すべきです。

私は東村山市で子ども向け日本語教室を立ち上げ、ボランティアで運営していましたが、参加者が増えてボランティアの育成が必要になりました。5年目ようやく市の事業として認められ、現在は毎年ボランティア育成講座を開催しています。無料で受講してもらっていますが、子ども向け日本語教室

でボランティアをしてもらうという条件です。子ども向け日本語教室のボランティア育成講座では、大人向けとは異なり、学習用語の教え方を指導します。その後、2年間のブラッシュアップ講座を受け、2年間受講した方がその経験をもって、ブラッシュアップ講座を自分たちで担うというシステムを作れば、人材育成ができるはずです。

また、子どもの教育は非常に重要です。日本社会に馴染んだ社会人を育成するためには、子ども向け日本語教室で学習用語を教えることが必要です。大人向け日本語教室は生活用語から始まりますが、子どもは異なるアプローチが必要です。すぐには実現できなくても、長期的な視点でこの仕組みづくりに力を入れてほしいと思います。

国際理解教育も重要ですが、多くの場合、異文化を子どもに教えることだけが強調されています。しかし、東京では7人に1人が外国人という現状があり、地域に住む外国人と共に生きるまちづくりに力を入れるべきです。

共生のまちづくりには、バーベキューや買い物、防災研修などの交流が効果的です。地域によっては、地域住民、中学生、外国人、ボランティアが一緒にカード形式のゲームで防災訓練を行っています。例えば「地震が起きました。地震の前に何を準備しますか。」というテーマで話し合うと、外国人は「知らない。」と言い、日本人は「外国人にはこういうことがわからないんだ。」と気づき、外国人は「日本では子どもの頃からこういう教育をしているんだ。」と学びます。

このように日本人住民、外国人住民、ボランティアと一緒に活動することで、お互いに理解が深まり、交流の機会が増えていくと思います。

委員

異文化交流は非常に難しいものです。恥ずかしい話ですが、私の所属する国際関係学部では、学生たちに多文化共生を教えています。教員同士の飲み会では外国人の悪口が出ることもあります。ある意味、我々の世代は多文化共生が難しいのかもしれません。

教育を受けていれば、犯罪データなどから外国人が危険ではないことはわかるはずですが、近所で外国人による犯罪があると、そちらの情報に飛びついてしまい、不安が先立ってしまいます。そのような人たちに「異文化理解」や「分かり合う」と言っても効果はありません。だからこそ、子どもの教育が重要です。

一方で、大人の問題をほっておくわけにもいきません。国際交流イベントには日本に溶け込みたい、日本に興味がある外国人が参加します。しかし、必ずしも自分の意思で来日したわけではない外国人もいます。そういう人たちは自分のコミュニティで情報交換する方が効率的だと考え、同じ国の人が集まる街ができていきます。

我々に必要なのは、日本人がそのコミュニティに入っていけるかどうかです。国際交流財団などに参加する日本人は国際交流に興味がある人たちです。そういう日本人が外国人コミュニティに入っていければ、日本に溶け込みたい外国人と外国のコミュニティに入りたい日本人が交流することで接点生まれ、多文化共生が進みやすくなるでしょう。

副会長

「外国人」という言葉に対して、昔から強い抵抗感を持っています。この言葉の認識は日本人の「縮み思考」から来ており、島国の人だからこそ「外国人」という言葉を使います。「100%の日本人」という意識も非常に問題があり、差別を生む意識だと思います。「99%の日本人」というのはいるのでしょうか。意識の向上が非常に重要です。

カルチャーアンドコミュニティネットワーク、つまり文化と地域の意識的なネットワークが大切です。自ら積極的にそこに参加していくこと、例えば、バーベキューイベントのような、国籍に関係なく誰でも参加できるイベントが重要です。これは他者を学ぶための良い媒体になります。

自分が外国人の輪に入れないと感じたら、自ら輪に入っていく、あるいは外国人の輪に自分から入っていくという姿勢が必要です。これは高齢になるほど強化されます。例えば犬の散歩をしていると、誰とでも話をするようになります。

私が最近経験したのは、新大久保でキムチを買いに行った際、お店の方と30分以上立ち話をしたことです。次第に仲良くなり、その後買い物に行くとおまけをたくさんしてくれるようになりました。自分から日本国内に住む人たちと楽しく過ごせるかを想像することが大切です。

「やさしい日本語」は実は不親切で、留学生からは「やさしい日本語を使わないでください、普通に話してください。そうでないと勉強になりません。」と言われることがあります。思いやりのある日本語指導が重要です。一人ひとりの生活環境や家族関係は異なるので、それを理解した上で、それぞれに適した日本語の使い方や声かけを考えることが大切です。

また、わからない言葉があれば「わかりません。」と言ってもらい、その場で一緒に調べるような姿勢も重要です。私も8年近く外国で暮らした経験があり、外国人として扱われる立場と、外国人を自国に迎える立場は同等だと思います。

「外国人」という言葉自体が「私は外国人ではない」という意識から生まれており、差別につながります。外国人を見た瞬間に「外国人」という言葉が頭に浮かぶこと自体が既に差別であり、それを意識しているかどうか重要です。

自立するための日本語教育の普及と拡張は非常に重要ですが、同時に自分の日本語の使い方や「外国人」という言葉の使い方についての意識改革も必要です。

会長

「日本人」という言葉についても考える必要があります。日本で生まれた外国籍の人は、選挙権や一部の公務員職を除けば、ほとんどの面で日本国籍を持つ人と同等に扱われています。

例えば、子ども手当が始まった時、日本で働く外国人で子どもが東南アジアにいる場合でも手当が支給されたことがありました。これは日本の制度の不備とも言えますが、日本はそういったことにあまりこだわらない国でもあります。

私は先ほど「日本国籍」と「外国籍」という言葉を使いましたが、日本に住む外国籍の人もいれば、移住者やインバウンドとして入ってきた仕事をする人、学ぶ人、旅行する人もいます。言葉の使い方を変えた方がよいかもしれません。

委員

大人にはまだそのような言い方はありませんが、子どもについては「外国人」ではなく「外国にルーツを持っている」という言い方をしています。日本国籍でも外国で育って日本語ができない方も含めてこのように表現します。

委員

大学では留学生、患者さん、文系の学生さんなど様々な表現を使います。国の状況によって国籍をいつ決定するかは、家庭や本人の将来によります。日本の教育を受けてきた人は当然大学に入る権利があり、クルド人でも入学できます。国籍の有無はあまり関係ありません。

事務局

教育委員会では「日本語指導が必要な児童生徒」という表現を使っています。これには海外で生まれた日本国籍の子ども、いわゆる帰国子女も含まれます。彼らも日本語指導が必要になることがあります。

会長

この用語は1つの文化であり、定義をしっかりとしないと誤解が生じます。ただ、板橋区だけで研究するのは限界があるかもしれません。

事務局

このビジョンを描く上で、最も端的にイメージできるのは現時点では「外国人」という言葉だと思います。ただ、表現方法については今後研究する必要があると認識しています。

委員

新しい言葉が作れば、板橋区が発祥の地として注目されるでしょう。

事務局

「外国にルーツを持つ方」が正しい表現だとしても、現在 58 万人いる区民が同じ定義を持っているわけではないため、ビジョンの中でこの言葉を使うと様々な解釈につながる可能性があります。「外国人」という言葉にも様々な意味合いがあり、日本語指導が必要という意味で使われることもあります。状況に応じた使い分けが現在求められていると思います。

会長

「多文化」という言葉を使う場合、それは単に異なる文化があるということの意味します。これは国内でも海外でも同様です。重要なのは、お互いの存

在を認知し、それを素晴らしいものとして尊重することです。

委員

以前は「異文化理解」という言葉が使われていましたが、現在は「多文化共生」に変わってきています。時代とともに変化しています。

委員

「外国人」の定義はどのようにお考えですか。どのような人を外国人と呼びますか。

委員

外国人とは、外国で生まれ育ち、外国の教育を受けた人との交流をする場合に使う言葉です。ただ、国籍について、日本は血統主義なので、血統が日本なのか外国なのかという問題があります。

委員

帰化した人たちは本来なら日本人のはずですが、帰化しても認めてもらえないことがあります。日本語がいくら上手でも「あなたは中国人だから」「あなたは韓国人だから」と言われます。

例えば、私の場合は中国籍を持っていますが、在中二世で韓国系です。日本に来た時に中国から来たと言うと、皆さんは「餃子の作り方」を聞いてきますが、私は 18 歳まで餃子を食べたことがなく、麻婆豆腐も食べられませんし作ったこともありません。

私は帰化していませんが、日本人の名前にしようと考えたことがあります。しかし、周囲の人には見た目から中国人としか見えないようです。中国に関することがあると、まず私に連絡が来ます。20 年以上住んでいても、中国の現状はよくわからず、友人関係も薄れていますが、日本の友人からは私は中国人だと思われています。

帰化すれば「あなたは日本人だよね」と言われ、中国に行けば「あなたは中国人だよね」と言われます。自分は何人なのかと考えた結果、国籍に関係なく「私は私」だと思い、手続きの面倒さもあって現在に至っています。

意識啓発がいかに重要かを常に感じています。以前は店で買い物をする時「日本語が上手ですね」とよく褒められ、非常に不快に感じました。本当に上手なら外国人とバレないからです。相手は親切心で褒めているのですが、大きなお世話だと思ってしまいます。

これは立場の違いから生じる文化の違いです。中国に久しぶりに帰った時、ホテルで中国語を話したら「あなたの中国語は本当に上手ですね」と言われ、悲しい気持ちになりました。自分がどの国の人間なのかは、自分の潜在意識の中でどのようなバイアスを持っているかによります。

会長

私たちの教育過程にはバイアスがあり、「日本人」と「日本人以外」という区別があります。しかし、我々が海外に行くと、すぐに「中国人ですか？」と聞か

れます。「はい」と答え、パスポートで確認されて違うと問題になるので、「いいえ」と答えますが、外見からはほとんど区別が付きません。同じモンゴロイドです。

世界的に見れば、モンゴロイド、インディアンを含めても、人類の祖先は 7 人しかいないとされています。人間が差別するような本質的な違いはないと思いますが、「違いがない」と言うこと自体が差別になります。違いがあると認めることが共生の第一歩です。相手がいなければ共生はありません。

価値観の違いがあることを認め、それを前提に共生することが可能です。私は昨日、共生学会に参加していましたが、そこではコンビビアリティ(共栄)という概念が議論されていました。共に存在するという意味での共生です。

マルチカルチャー共生とは、お互いの存在を認め合うことが基本です。差別のない社会を目指しますが、人間は感情と欲望を持っているため、どうしても差別は生じます。それを解消するのは宗教か平和教育しかありません。お互いを理解し、尊重し、尊敬することで成り立つものですが、それをどう実現するかは容易ではありません。板橋区として地道に取り組んでいくしかないでしょう。

私は一緒に生活することが最も効果的だと思います。例えば、外国人が日本の一般家庭に滞在し、コミュニケーションを取りながら日本文化を体験するような取り組みも考えられます。観光客向けの体験だけでなく、移住者や長期滞在者に対する取組も必要です。従来の枠組みを超えた発想が求められるかもしれません。

委員

時間があれば、5 年後の板橋区についても話したいと思います。板橋区は高齢化が進み、介護施設や特別養護老人ホーム、有料老人ホームが非常に多い区です。そこで働くヘルパーの多くは現在、外国人、特にミャンマー人です。

彼らの教育は大変だと思います。日本語を習得しないと入居者への対応ができません。板橋区の課題として、施設職員の養成が非常に重要です。彼らは街に出て生活しているからです。

彼らは日本で給料を得て母国に送金していることが多いですが、そういう人たちの共生は難しい面もあります。しかし、彼らは非常に真面目です。私の母も施設に入所していて、ミャンマー人スタッフの対応を見ているのですが、日本語も上手で親切です。彼らは明確な目的を持って日本に来て働いています。彼らが休日などの自由時間にどのように地域と関わっているのかに興味がありますが、まだ十分に把握できていません。職場での対応しか見ていないからです。今後、自分でも研究してから意見を述べたいと思います。

将来的に、日本人の介護士は減少し、海外から来る人材に頼らざるを得ません。彼らは母国で教育を受け、来日後も日本語をある程度習得してから現場に出ています。彼らと共に生活していくこと、また彼らへの災害対応指導も重要です。

施設内では防災訓練を行っているようですが、地域の防災訓練にも参加してもらうことが大切です。生活文化や環境が異なるため、日本の中に溶け

	<p>込んでもらうには工夫が必要です。地域としても受け入れる大きな心を持つべきです。</p> <p>町会長として、外国人が参加した際には皆ウェルカムな姿勢で迎えています。地域の構成員として一緒に活動することが最も重要です。交通ルールなども大切ですが、自分の身を守るための防災知識(地震、水害、火事など)を身につけるには、地域との交流が欠かせません。</p> <p>日本の福祉を支える人材をどのように育成していくか、施設だけでなく地域全体で考えることが重要です。彼らは現在、日本にとって宝となっています。</p> <p>会長</p> <p>ありがとうございました。様々なテーマが出てきましたが、表面的な問題だけでなく、より深く地域社会のあり方を考え、デザインしていただきたいと思います。</p> <p>今後増えていく外国人と板橋区民との関わりをいかにスムーズにし、共に暮らしていくかという観点で考えることが重要です。</p> <p>事務局</p> <p>本日は貴重なご意見をありがとうございました。いただいたご意見は今後の多文化共生ビジョン策定に活かしていきたいと思います。特に、「外国人」という言葉の使い方や、子どもの教育支援、地域との交流の重要性など、多くの示唆に富むお話をいただきました。</p> <p>次回の会議では、今回の議論を踏まえた具体的な施策案についてご検討いただく予定です。引き続きよろしくお願いいたします。</p> <p>会長</p> <p>それでは、本日の会議はこれで終了いたします。皆様、お疲れ様でした。</p>
所管課	<div>区民文化部 文化・国際交流課</div> <div>(電話 3579-2018)</div>